

●新木安利『田中正造と松下竜——人間の低みに生きる』
(海鳥社)、二〇一七年三月)

本書は、谷中村強制破壊一一〇年の今年最大の収穫といえる。帯の文章「足尾銅山鉍毒事件、豊前環境権裁判」。〈民衆の敵〉とみなされながら、虚偽の繁栄を逆照射した二人の生き方を探る。松下竜一の文学と活動、田中正造の生涯をたんねんに辿り同調圧力に屈せず、人間の低みを生きたとは何かを問う。」

私(赤上)は、3・11後、足尾銅山鉍毒事件を語る時に、松下の「誰かの健康を害してしか成り立たぬような文化生活であるのなら、その文化生活をこそ問い直なければならぬ」(「暗闇の思想」)をいつも最後に引用してきた。

松下は『豆腐屋の四季』出版で注目され、環境権・反戦・反核・反原発・冤罪・死刑廃止等人権を守る運動に関わり続け、二〇〇四年に六七歳で亡くなった。「結局負けても。

○+○+○:が、いつか五になり六になることを信じていた」という。これこそまさに田中正造の精神である。松下の遺品の中から正造のパネル写真が二枚出てきた。松下は、

「豊前火力発電所反対運動をしている時に、人々から〈民衆の敵〉とみなされ批判されていた」。いうまでもなく〈民衆の敵〉とは、ノルウエーの劇作家イブセンの戯曲

『民衆の敵』(一八八二年作。竹山道雄訳、一九三九年初版、岩波文庫。現在絶版)による。なお、原千代海訳では「人

民の敵」となっている。(『原典によるイブセン戯曲全集』第四卷、一九八九年版、未来社)

ストックマン医師は、町の観光産業たる温泉が毒水で汚染されていることを民衆の為と思つて暴いたところ、町の発展を阻害すると、逆に〈民衆の敵〉にされ孤立する。迫害にめげず彼は町に留まり正義の闘いを続行した。著者は、このストックマン医師に、田中正造と松下竜一を重ね合わせる。

著者は、松下の豊前環境権裁判・チッソ水俣事件・土呂久鉍毒事件等の公害・環境問題全般を総括して「田中正造の受難」を書き下ろした。

田中正造は実践家である。常に闘いの現場から発信した。著者自身も松下達と共に闘ってきた実践家だから、正造の生き方や正造の文章の解釈、鉍毒被害民運動などをほぼ正確に叙述することができたのだらう。正造周辺の人物への目配りも万全。見事なのは、正造死去から現在に至るまでの足尾銅山鉍毒事件経緯を「それから」として一章さいていることである。

3・11後の原発問題、公害、環境問題、田中正造の位置付けを考えるに当たつて今後不可欠の一冊となるだろう。

渡良瀬川研究会 赤上 剛

(町田市立自由民権資料館紀要『自由民権』三一号〔二〇一八年三月発行〕より)